

田廻音楽事務所旗揚げ公演 『輪舞曲～ロンド～』

作品分析論文 by 石坂 晶

「田廻哲学の骨子とその魅力を考える」

一切は行き、一切は帰ってくる。存在の車輪は永遠にめぐる。
一切は死に、一切はふたたび花ひらく。存在の年は永遠にめぐる。

『ツアラトウストラはかく語りき』フリードリッヒ・ニーチェ
"ALSO SPRACH ZARATHUSTRA" Friedrich Nietzsche

『輪舞曲～ロンド～』は、アンデルセン童話「マッチ売りの少女」を基に、田廻弘志が創作したミュージカルだ。

ご覧になった方は驚かれると思う。まさか童話をそのままやるまいと思っていると、そのまさか、ものの見事に最後まで童話そのものを見せられる。なんのヒネリもない。

しかし、観客は何ともいえぬ感動を覚えるのではないだろうか。華麗で個性的な楽曲に、美しい韻文の歌詞を持つ佳作ではあるが、単純でよく知り尽くしているこの童話から、なぜこうまでの感動を受けねばならないのだろうか？

この疑問をスタートとして、この作品の魅力を考えたい。

●『輪舞曲～ロンド～』は、輪舞曲である

『輪舞曲』は全16曲から成るが、しかし、16のパートを持つ1曲であると考えられるのではないだろうか？

前奏曲は、作品中の主な主題の変奏メドレーである。これによって、この物語は冒頭で既に一巡していることになる。また、舞台の最初と最後を括る、「前口上」・「仕舞口上」という曲は、同じ曲でもある。そして、いくつかの循環する主題が物語と関わりあいながら、劇中幾度か変奏されてゆく。

つまりこの作品は、『輪舞曲』そのままの構造を持っているのだ。はじめとおわりが繋がって延々と鳴り、人々が輪になって踊るための舞踏曲の形式を、である。

では、その鳴り続けている『輪舞曲』とは、何なのだろうか？

●「大きなこの世界は、不思議に満ちた舞踏会」

物語はアンデルセン童話に過ぎないが、田廻がたった一つ付け加えた、示唆に満ちたメタファーがある。それが、「大きなこの世界は、不思議に満ちた舞踏会」である。

5曲目で、少女が幸福そうな人々が集う大晦日の大通りでふと歌う内容は、11曲目でのリプライズに至ると、亡くなった祖母の言葉を回想していたことが分かってくる。この「祖母の言葉」に、作品の哲学が凝縮しているといえるだろう。

No.11「祈り」より一部引用 (メロディはテーマ曲MIDIと同じです)

年は暮れて 年が明けてゆき この日に
過ぎゆく時 新たな時に なる
花咲き乱れ 緑萌えてゆく 季節も
実りつけて 白い世界へ 遷る

命溢れて消える 時は流れてゆく

私は何を見る？ きっと
ばあやは言う「夢は巡る いつか解る」筈と
大きなこの世界は 不思議に満ちた 舞踏会

生まれてくることも 消えて逝くこともみな
何も決めることは 出来ないとしても
心を開いたら 広がる世界が在る
命尽きるまでは 消えない

と信じたら この広場では 凡ての物は 手を繋いで
不思議な 舞踏会では 何が起るか 知らないから

ばあやはそう言った よく解らなかつた でも素敵な言葉
この世界が舞踏会なら 夢見て

季節巡り 年は巡りゆき この日は
二度と来ない 新たな時へ 遷り変わり進むの

同じ場所で 光抱いて 輪を描(えが)いて 回る
諦めも夢もみな 一緒に踊る舞踏会 小さな 心に

ここで歌われるのは、この世界を一つの舞踏会に例えたメタファーだ。全ての事象が手を繋ぎ、関係しあって輪になり、とどまらずに移り変わる季節とともに廻ってゆく様子を歌っているのである。

●古今の思想を受けて発信するイメージ

この、全てのものはとどまらずに流れ、輪のように同じところに帰ることを永遠に繰り返している…とする思想は、古今東西を問わずに多くの思想家が唱えてきたと言えるだろう。共通項を感じた思想家を簡単に紹介したい。

まず、古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスの「パンタ・レイ（万物は流転する）」である。「万物は宇宙の法則によって、火から生まれ、変化し、火に帰り、すべては同一である」と考える思想だ。近代では、物質とエネルギー（熱量＝火）が本質において同義であることや、全ての物質は、突き詰めれば陽子と電子の個数の差異に帰す事などが発見されるにつれ、真理を数千年前に言い当てた哲学として、脚光を浴びた。

釈迦が唱えた「輪廻」の思想も連想しうる。生まれて死んで、また生まれて、永遠に命の輪が連なってゆくイメージである。この輪の中では、生も死も喜びも苦痛も表裏一体のものとして繋がっており、欲望や快樂を減しないと苦痛からも逃れられないとされる。

ニーチェが「ツアラトウストラはかく語りき」等で19世紀に打ち出した「永劫回帰」の思想にも大変近い。全てのものは永遠に同じところに回帰してくる…という思想である。田廻の愛読書でもあるようだ。

20世紀では、ミュージカル「Cats」の原作詩人として有名なT.S.エリオットが、「In my beginning is in my end. 私の始りは私の終わりの内にある」などと、ノーベル文学賞に輝いた一連の哲学詩の中で表現している。有名な詩句を以下に紹介しよう。（拙訳）

『四つの四重奏曲 バート・ノートン』より 冒頭 （拙訳）

Time present and time past
Are both perhaps present in time future
And time future contained in time past.
If all time is eternally present
All time is unredeemable.

現在の時と過去の時は
おそらく共に未来の時の中に存在し
未来の時はまた過去の時の中に存在するのだ
全ての時が永遠に存在するというのなら
全ての時はことごとくあがないえないものとなる

日本人になじみ深い表現をあげるなら、鴨長明の「方丈記」冒頭文だろうか。～行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつきえかつむすびて、久しくとどまることなし～である。これは、世界を川に見立てており、浮かぶ泡とは万象のことと解釈できる。

おもしろいことにヘラクレイトスも似たようなことを言っている。
「人が川に2度足を踏み入れても、そこが同じ川であるというのは人の思いこみだ。次々と違う水が流れて来て、それはすでに同じ川ではないのだ。」

なるほど。まさに世界とはそのように常に変化している存在だろう。

●過去の遺産を再構成し、新たなアプローチで発信

このように、田廻が打ち出すのは、古今の思想家によって語られてきたある種の数々のイメージを元に再構成した、田廻自身の哲学であるといえよう。

日常のなかで、誰もが流れゆく事象を惜しむ。惜しむし、不思議とも恐怖とも感ずる。無常観に苛まれることもあるし、いつか死んで無に帰すならばすべては無駄か？という根源的な問いを、我々は拭いきれず胸に隠し持っている。このように、これは、誰もが思い至るイメージであるといえるだろう。

そして、これらのイメージは、『輪舞曲』では、小難しい哲学書とは違うアプローチで発信され、観客に届けられる。音楽と韻文詩と作品構造の融合から生まれた、新しいアプローチ方法である。

田廻は、用いた全ての手法でもって相乗効果を起こし、我々の精神を日常からも童話からも一気に引き離そうとする。我々が感動したのは、童話そのものの悲劇性だけではなく、その悲劇を華麗な和音で表した楽曲だけにでもないのだ。

曲に身を浸し、歌詞に聞き入るうちに我々は無意識にイメージしはじめる。ゆったりと廻る季節、廻る月と陽。萌えては実って枯れる自然。生まれ死んでまた生まれることが、連なっている世界の神秘。そして、眼前で死んでゆく少女…。

そのとき、我々は、めぐる楽曲とともに、めぐりゆく我々の世界を、この宇宙そのものをイメージ上で体感しうるのはないだろうか。この作品が投げかけるのは、この世界、地球そのものを、はからずも実感させる重みではないだろうか。

私自身の体験としては、曲に浸りながら本作品の意図を考えていて、何かに気づいた瞬間、以前TV番組で見たゆったりと廻りゆく銀河や、アポロから撮った地球の写真…などの記憶が掘り起こされて意識野に結像した。それはそれは、まざまざとした連想が走った。そのとき体感したのは、めくるめく茫漠さであり、無常感であり、とてつもない大きさと重みであった。足元がゆらぐ、めまいそのものでもあった。

もちろん人によって感じ方の差があり、また、自然に舞台を楽しむ観客は俳優の声や姿を追うのに一生懸命で根底の哲学にまでは観劇中思い至りはしないだろう。言葉で説明できる理解もほぼなされないだろう。作家の哲学は巧みに秘められ、土台としてあるのみなのだ。

だとしても、「単なる童話からなぜ大きな感動が？」という疑問を残すのではないか。それにより、観客自身が内なるみずからの思索へと歩みだすかもしれない。曲が耳に残り、そのとき駆け巡った思索の残滓が観客の心に留まるかも知れない。

●『輪舞曲』の二重構造と触媒効果

独りよがり小難しい思想を振りかざしても、舞台は楽しいものにならない。しかし、アメリカの偉大なミュージカル作家：ソンドハイムを心の師と仰ぐ田廻は、どうしても哲学を内包した舞台を書きたかったようだ。

そのためにとられた手法が、作品のなかに上下二層を用意することだった。表層には、マッチ売りの少女の物語と韻文の歌詞。深層を貫くのが、田廻の哲学的イメージであり、その全てを統合するのが、楽曲の構造である。

この構造によって、表面の物語を楽しみながら、知らず知らず深層の哲学を受け止めさせる…ということが可能になるかもしれない。芸術性と娯楽性を両立させるための試みである。

ではなぜ、このような難しい構造を作ったまで、ある種のイメージを人々に贈ろうとしたのか？ その答えは、作家がその基本思想を明らかにした劇団HPのインタビュー記事のなかで、以下のよう語られている。

「普通だったら日常に埋もれて考えない大事な事柄を舞台上で提示し、生活のなかで失いがちな「考える」ということを促進させる『触媒』としての舞台を、僕は書きたい」

『触媒』として機能する舞台によって、人々に考えて欲しいという田廻。
では、何を考えさせたいのだろうか？

●「人はなぜ生きるのか？」

冒頭の「前口上」で、我々は「人はなぜ生きるのか？」といきなり問われる。そして「誰とてわからぬもの」と続く歌詞に、確かにそうだと思わされる。

今まで、すべての人が100%納得する答えを出した思想家も宗教家もないこの問いこそ、我々が胸に秘めつつも、あまりに大きすぎて考える時間もなく蓋をしている、人類最大の問いの一つ、ではないだろうか。

こんな問いを投げておいて、田廻は作品中で答えを出していない。もとより、答えの出ない問いであることは、誰にも明白である。では、なぜ田廻は作品の冒頭でこの問いを掲げたのだろうか？ その答えも劇団HPのインタビュー記事に見出せるようだ。

「例えば、死。例えば、人はなぜ生きているのか？ 例えば、どうして争いは起こるのだろうか？ そんな誰の心にもふと湧く疑問。だけれど忙しくてつきつめて考えているヒマがなくて、ずっと蓋をしている問題を、分からないなりに、この件が不安らしい…と意識することさえできれば、かなり実践的に思考することができる気がします。

謎だった漠然とした不安が意識できたことによって、具体的に考えたりできるんじゃないかな。舞台を見たその場ではただ疑問だけが残って、一年後とかに「ああ！ そうか！」となにかひらめくかもしれないような、思考のきっかけを人々に贈りたい。普段意識しないことを意識せざるをえないような舞台を創りたいのです。」

田廻が創ろうとした舞台は、「日常では考えないような事を考えさせる『触媒』としての舞台」なのだ。そして、田廻が観客の心に起こさせたい反応は、「問題を意識野に上げ、考えることを推進し、個人の中で思考が始まる」ことであるといえよう。そしてその目的は『輪舞曲』においては、おおむね達成されうるように思う。

なぜ、あの少女は死ななければならなかったのか？
なぜ人は生きているのか？ そういえば、なぜだろう。
大きなこの世界は舞踏会？ なにが廻っているのだろう。
それにしてもなぜ、こんな童話に感動したのだろうか？

…このような、非日常的な疑問を胸に抱いて観客は家路につく。多かれ少なかれ、形而上的な宿題を受け取ってしまう可能性がある。もしも意識に上れば、これらの疑問を折りにつけ思い出しつつけるだろう。答えはすぐに出ないし、ずっと答えのでない思考の芽が心に植えられる。

この考える「過程」にこそ意味があると田廻は言う。考えつづけていけば、少なくとも、「何が不安

なのかわからなくて不安」という最悪の状態からは抜け出せるかもしれない、と。

死が不安なのだ、と意識すると、おのずと自分もいつか死ぬということに考えがいたる。いたって初めて人は、「どうよりよく生きるか」ということを考えられるスタートに立ち、自分の生き方を創造できるのではないだろうか。

●「人はなぜか いきていれば 夢をめぐらせ」

人はなぜ生きるのか？と問いかけつつ、答えは出さなかった田廻だが、彼なりのヒント、「夢」というキーワードを用意した。「人はなぜか いきていれば 夢をめぐらせ」である。

『輪舞曲』のストーリーに限らず、不条理で辛いことの多いこの世だが、人はなぜか夢をみる事をやめない。そこに、なにかのキーがあるのでは？と考えているようだ。

この言葉どおり、少女は、最後まで夢を見つづけた。それは実にささやかだが、ご馳走であったり、家族が幸福に暮らせたり…と言う事だった。彼女は、そのみはてぬ夢の実現のために、過酷な現実にも耐え、自分にできる最善を尽くして生きていた。しかし、逆境に追い込まれ、これからどう夢見て良いのか分からない…と夢を見続ける気力が尽きたとき、彼女は命を落とすのである。

彼女はマッチを売りたいのではない。生きたい・幸福になりたいのである。そしてこれは、我々すべてに共通する基本的な欲求、希求でもある。我々が少女に寄せる共感、マッチが売れるかどうかの希求にではない。生きたい・幸福になりたい、この希求にこそ、観客は心底共感したのだ。

そして、田廻が示唆するのは、夢を見るのが生きることの原動力であるという事。「夢見ること＝生きること」、と主張しているのかもしれない。人の夢と書いて「はかない」と読むそのままに、人の命も夢も、儚いものである。しかし、儚いと知りつつも人は決して夢を手放せず、また、夢を支えに己を強くすることができる。

夢をみるその過程、夢を実現するために持ちうる能力を出し、学び、考えて、その道を模索する過程こそが、人の生なのではないか？これが、「人はなぜ生きているのか？」という問いへの、田廻自身の答えであるだろう。

そして同時に、田廻は我々に問うているように思う。
少女は、あんなにも生きることに對して真剣であった。
あなたはどうか、と。あなたの夢は何か？ と。

観客は、このような問いを言葉として受け取るわけではないだろう。ただ、「必死で生きていてすごいな」といった感慨に對して、「じゃあ自分はどうかだろうか？」といった内省が生じる可能性は、多々ありうる。

大して受け止めなければ、受けても受け流す人もあろうし、深く考え始める人もいるだろう。たぶん、こういうテーマについての内省を、もともと感じているものの蓋をしていた人には、この作品の『触媒』は特に強く機能するのだろう。触媒は特定の物質と出会った時にしか反応を起こさない。したがって、この作品に大いに胸打たれる観客もまた、一定の特質を持つ者に限られるだろう。つまり、万人に賞賛される作品ではない、と予想する。

もとより解がある問いではないのだ。しかも、あまり突きつけられたくない問いでもある。しかし、この問いを意識した結果、自分の望みや本当にしたいことなどが明らかになり、自分なりの「答え」を見出せるかもしれない。そういう価値ある問いを、この作品は贈ろうとしているのではないだろうか。

●微笑んで逝く充足の死

この世界は大きな舞踏会である…と少女に教えた祖母は、彼女の最後の幻影の中に現れ、苦渋に満ちた短い生を送った少女をその胸に迎える。もう苦しまなくてよい、というように。

夢を抱き、生きることに立ち向かい、とことんまで闘った臨界点に死があったこの少女の場合、そ

の死は、恐怖ではなく、魂の解放であったかもしれない。夢を見るという、生きるという、人間最大の欲望を手放した瞬間である。

少女は、生きることに燃焼し尽くした末に、欲望から己の魂を解き放って、充足して死んだ…と描写されるのである。はたしてこの場合、この死は事実としては悲劇であるが、少女自身の観点で見たとき、悲劇といえるだろうか。

死は誰にでも訪れる以上、死＝不幸という等式は単純には成り立たない。死そのものが不可避の必然であるがゆえ、本来、単に死は死であり、それ以上の確定した意味はもたないはずなのだ。死の意味付けは、個々の心情によってなされ、一般に、人の欲望は最後まで尽きないので、たいがいの死は不幸なのである。

しかし、燃焼した果てに、もう良い…と思えて、夢＝欲望から己を解放して充足のうちに死を迎えたら、微笑んで死ぬことができたなら、その死は「幸福」であるかもしれない。少なくとも、そうそう悲劇というわけでもないのかもしれない。

ここで、「微笑んで逝く充足の死」がありうるという仮定が提起された。死＝不幸＝究極の恐怖、と通常考える私たちにとって、これは、大きな価値観の転換である。そして、この可能性は、ささやかな救いとなって、いずれ逝かねばならぬ我々の胸に小さくも明るい火を灯すのではないだろうか。

さらには、季節がめぐり月陽がめぐるように、また少女の生もめぐってくるかもしれない…という連想を、観客に持たせうるかもしれない。アンデルセンの元々の設定である、大晦日の夜の物語が、新年の朝を迎えて終わる点からも示唆を受ける。

これは、特定の宗教が言う「生まれ変わり」や「輪廻」の思想ではなく、冬枯れた草原が再び花畑となるその事実から、自然と人が連想してきた「めぐる命」という発想である。

この発想は、よく言われるものの、もちろん何の根拠も無い。しかし、このような発想は、ゴールに死が確定している我々に、生きてゆく上での救いを与えるだろう。

自分も自然の一部であると実感するのは、とても安心できる経験である。

●世界は繰り返している

さて。世界は終わらない輪舞曲の舞踏会であるというなら、19世紀のコペンハーゲンであのように生きて死んだ少女は、現代にもいるというのだろうか？

少女は現代で生を繰り返している、と仮定してみよう。すると、例えば彼女は、フィリピンのゴミ捨て場で金物を拾っているかもしれない。ブラジルのストリートチルドレンとして、信号待ちの車を磨いて小銭をねだっているかもしれない。

世界は繰り返し廻っている、と仮定した時、同じ構図は、再現されているのだ。少女の事故を目前で見ながら、「お前にやる金があるなら、その金でウチの子になにか買わねば」と言った紳士は、我々であり、またあの少女と小さな関わりを持ち、昇る月と廻る陽を共に越えている。

そして、あの夜の結末は今日も起こっているのだ。一日数万人が餓死するのも我々の世界の一面である。新年の朝、少女の死体を見つけた街の人々とは、そう、他ならぬ我々だったのである。

劇中で我々は、あの紳士の言葉をひどく残酷に受け取るが、これはごく普通の人の言葉なのだ。…と、気づいたら、あの紳士に感じた非難は急に己へと向く。

向いたからといって何かが即変わるわけではない。安易な同情や偽善的な施しを推奨するものでもない。誰しも、自分と身近の者が大事で、その先まで考える余裕もない。しかし、多くの人がこういう事実気づき、はっ！とすると、何かが変わっていくきっかけにはなるのかもしれない。

世界が手を繋いでいると実感し、ミクロである個人がなにを感じどう考えるかが、マクロである世界を左右するという実感を個人が持てば、あらゆる事象に対して「他人事」と考える感性は減ってゆくだろう。

自分が手をつなぐ先に、あの少女が居る。そう実感することができたら、視野は飛躍的に広がる。責任からは逃れたいものだが、意識する・しないに関わらず、影響は確実に少女に伝わるのが世界のしくみだ…という、『輪舞曲』的な概念に触れると、個人の世界観に変化が起こるかもしれない。

●輪になり、手を繋いで生きる私たち

誰しものがそれぞれの夢を抱き、そうと知らずにも関係しあい、地球というまるい軌道を描くまるい大地の上で、手を繋ぎ共に踊っているのが、この世界である…。

…このような、『輪舞曲』的世界観を多少なりとも感じさせられると、おのずからなんらかの思考をはじめてしまう。それも、日常的ではない、実にめんどくさい事柄について。田廻は、こういった人々のめんどくさい思考を引き出して、社会に変化を起こさせたい…とも、インタビューの中で語っているのだ。

我々の時代には閉塞感が否めない。社会機構としての宗教は滅び、絶対的に善悪を断じてくれる「神」は社会から居なくなった。なんでもアリで自由な価値観は弱肉強食の論理を助長し、個人は、なにを善として目指すべきかを見失いがちだ。基本的に豊かである社会は、突き詰めて考える機会を与えない。目的を見失っている不安を忘れたくて、私たちは刹那的な楽しみを見つけようとするが、心底からの安心は持ちにくい。そして、心底からの夢を持てなければ、人は自分の生きる意味を見出すことができない…。

現状がこうだとすると、個人個人が「考える」ということが非常に大事ではないか？神が救ってくれないならば、救いは自助、または相互扶助でしか訪れないのだ。この点において、考えることを促進する『触媒』としての舞台作品は、大変意義深い。

こういう気運を訴える田廻作品が多くの観客に観られたら、「個人意識における、考えようとする改革」が起こり、結果、個々人の安定が、社会の安定を促すかもしれない。

むろん、小さな劇団の無名作家の1作品に、そのような力は、ない。皆無である。これは机上の空論にすぎず、誇大妄想とそしられるかもしれない。しかし、私は、このような観点から作品を創るこの作家に、共感を寄せて止まない。

『輪舞曲』的な思想が、もしも大々的に鳴り響いたら？
人々の心に、社会に、小さくも確かな変化があるかもしれない。

繰り返すが、むろん空想にすぎない。
しかし、そう思わせてくれるところが、私にとってのこの作品の最大の魅力である。

以上、本作品の魅力のある一部を明らかにできたかと思う。
これをもって『輪舞曲～ロンド～』の解題としたい。

●最後に

この小さな作品が、田廻の潜在能力の全てではあるまいと思う。
ゲーム音楽の分野で、重厚な管弦楽作品を書いてきた作曲家である。例えば、もっと多くの役者を使い、管弦楽をバックに歌わせる大規模な作品を創れる機会をこの作家に与えたら、何を始めるだろうか？

田廻弘志。非常に楽しみな舞台作家である。

石坂 晶

脱稿2001/09/24
短縮改稿2001/12/12

